

日本語話者の韓国語カタカナ表記に関する一考察

黒柳子生*

heiliuzisheng@hanmail.net

<目次>

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4.3 結果の分析 |
| 2. カタカナ表記法に関する先行研究 | 4.3.1 語頭平音のカタカナ表記 |
| 3. 現行カタカナ表記法の問題点 | 4.3.2 終声のカタカナ表記 |
| 4. 分析 | 4.3.2.1 語中終声 |
| 4.1 調査対象 | 4.3.2.2 語末終声 |
| 4.2 調査方法 | 5. おわりに |

主題語: カタカナ表記(Katakana notation)、平音(lax consonants)、終声(final consonants)、開音節(open syllable)、閉音節(closed syllable)

1. はじめに

ある言語の言葉に対して自国語の外来語として表記する際に適用する規定を外来語表記法という。各言語によって表記システムが異なり、ある言語では同じ音として認識される音価に対しても他の言語で異なる音として区別されることがある¹⁾。ある言語を他の言語の文字に正しく置き換えることは不可能である(小川2012)というように、韓国文化が日本で広く受け入れられるようになった現在でも、一つの韓国語の単語に対して依然として多くの表記が存在している。韓国語のカタカナ表記に関しては江戸時代の学習書から明治期の文献にも多く見られるが(편무진2009)、その後はごく最近まで、韓国語の固有名詞は現地音で発音するのではなく、日本語の漢字音読により発音されており、カタカナで表記することも少なかった(小川2012)。そのために表記がいまだに定まっていない状態である。以下(1)と(2)は一つの韓国料理に対してカタカナ表記が複数存在する例²⁾である。

* 高麗大学校言語学科博士、TLA専任講師

1) 弁別的資質として日本語では清音(無声音)と濁音(有声音)の対立が存在し、それに相応して韓国語においては平音(無気音)と激音(有気音)の対立が存在している。

2) 장원재(2009)は語中終声(ㄹ)の「ン」と「ム」の混用、語末終声(ㅁ)の無表記、「ッ」と「プ」の混用などに

(1) 비빔밥 a. ビビンパ

b. ピビンパッ

c. ピビムバプ etc.

장원재(2009)

(2) 김밥 a. キンパ

b. キムパッ

c. キンバプ

d. ギムバプ etc.

小川(2012)

このように韓国語をカタカナで表記する際には、語頭における初声平音の有声無声表記、終声の表記などに揺れがみられる。特に韓国語では語頭の平音は無声音として発音されるために、「비빔밥」の「비」は[bi]ではなく[pi]のように発音されるために、音声に重点を置く表記法であれば「ビ」よりも「ピ」として表記されるべきである。

しかし、語頭の破裂・破擦音の平音は日本人の耳には濁らずに聴こえても、それを韓国人に対して発音するときには濁らした方が伝わりやすい(成儒彬2017)ので、「ピ」表記にした場合は韓国語の「피」¹⁾として認識される恐れも存在している。また、語頭での平音と激音の表記がどちらも日本語では清音で表記されることの弊害も固有名詞の識別などの場面においても数多く発生している。次(3)は韓国の地名のうち、語頭での清音表記による混乱をもたらす恐れがある事例を表したものである。

(3) a. 청주 Cheongju チョンジュ

b. 전주 Jeonju チョンジュ

このように韓国語では「ㄷ」²⁾と「ㅌ」³⁾は明確に区別されており、さらにローマ字表記においても「Ch」と「J」で区分されているにも関わらず、日本語のカタカナ表記においてのみ平音が語頭では清音で表記することになっているせいで「청」=「cheong」=「チョン」=「전」=「jeon」という論理が成立してしまうのである。

一方で韓国語の音韻変化の規則により、同じ平音表記でありながら出現位置により実際に発生される音価が異なる場合も存在する。その例が(1)で示した「비빔밥」である。これはハングルで発音を表記した場合には「비빔밥」のようになり、表記上は三つ全てが平音であ

より異表記があるとした。小川(2012)では、1)初声のㄱとㅋを清音で表すか濁音で表すか、2)終声のㄹを「ン」と表すか「ム」と表すか、3)終声のㅁを「プ」「ブ」「ッ」のどれで表すかによって表記が十数通りが考えられるとしている。

る。しかし、発音上は三つ目の「ㅃ」は「ㅍ」で発音されることになるが、表記は変わらない。そのためにローマ字表記などでも問題が発生している。「비빔밥」の英語表記を見ると以下(4)のようになっている。

(4) bibimbap

このように日本語のカタカナ表記においては実際に日本語話者の耳に聞こえる音声を重視する表記方法と、ローマ字表記のようにハングル表記を転写した表記対応重視のどちらを優先させるのかという問題が長い外国語表記の歴史に今も根強く残っているように見える。

本稿は、上述した韓国語のカタカナ表記に関して日韓での議論を踏まえたうえで、平音の語頭および語中・語末における終声のカタカナでの表記について日本語を母語とする韓国語学習者の表記認識を調査・分析することを目的とする。

2. カタカナ表記法に関する先行研究

韓国語のカタカナ表記に関しては2000年以降に様々な研究調査が行われているが、황정민(2002)は韓国語の固有名詞のカタカナ表記に関する研究で音声中心の表記法を原則としてはいるが、表記法の内容を具体的に調べてみると音声中心の表記法があまり守られておらず、同じ公共機関が発行する資料においても表記の揺れが存在する事実を指摘し、韓国語のカタカナ表記の統一の必要性を強調している。

박혜란(2007)は韓国料理の日本語表記に関する研究を通して、発音表記の基準として初声の表記はできるだけ清音および半濁音を使用するとし、「キムパプ」や「ピビンパ」のように表記することを主張した。

장원재(2009)は韓国の料理名の日本語表記における混用実態に関する研究で、ウェブ検索を通して、1)語頭の初声では比較的清音表記され、2)語中の初声では接続形態素によって清音と濁音の表記が揺れており、3)語中の終声、4)語末の終声の表記の傾向について検証した。

한탁철(2011)は韓国の料理名に見られるカタカナ表記について、語頭の平音には清濁表記に揺れがある一方、同じ平音である「ㅃ」は語頭・語中に関わらず全て濁音表記されている

ことを指摘しているが、語頭では清音で表記をしても韓国語話者には無声・有声音の区別がないために、語頭では清音で表記し、語中では濁音で表記することが妥当であるとした。

また백승민(2018)は韓国の固有名詞の日本語表記法に関する考察の中で韓国の首都圏地下鉄の駅名表記を対象にアンケート調査を行い、이주리애(2019)では韓国の観光地名の表記に関する調査を行い、「音訳」「漢字訳」「対応訳」「意味訳」などの翻訳方法があるとして表記改善の必要性を提案した。しかし、この両研究は表記方式に関する研究であり、韓国語のカタカナ表記の様相について分析した研究ではなかった。

このように先行研究では各研究者が異なる見解を示しており、カタカナ表記に対する統一的な方向性を見出すことはできていない。また、これらの研究はどれも飲食店や案内冊子などの書面に書かれたカタカナ表記であり、実際に日本語話者が韓国語の語彙のカタカナ表記についてどのように認識しているのかを調べたものではない。

3. 現行カタカナ表記法の問題点

韓国語を日本語で書き表す表記法については1987年に示された「국어의 가나 문자 표기법(国語の仮名文字表記法)」に示されているが、実際にはあまり守られておらず、複数の形態の表記が現れている(황정민2002)。このように一定の規則は存在するものの、現在の実情に合っておらず、また正式な法律として告示されたものではなく、この法則を無視する形で表記がなされたりするなど、影響力が弱いように考えられる。

배석주(2001)は2001年編修資料の改正を通した大きな特徴が、原則は音声的理論に基づきつつも、実際の側面も考慮に入れて相反する「韓国語の弁別力確保」と「音声・音韻論的視覚」の二つの見解を少しずつ受容した結果だとしている。韓国語の弁別力確保の側面と音声・音韻論的な視覚を全て考慮にいったもので、全ての表記において韓国語の無気・有気音を日本語の有声・無声音で表記することができる余地を残した点が最も大きな特徴であるとしている。

김윤미(2012)では韓国人日本語学習者を対象に「국어의 가나 문자 표기법(国語の仮名文字表記法)」に基づく韓国語の日本語表記実態調査を通して発見された問題点として、1)清音と濁音、半濁音に対する弁別力不足、2)パッチム、3)促音の追加および脱落、4)長音表記、5)子音+母音音節の間違い、6)促音と拗音の弁別力不足を上げている。

小川(2012)は韓国語のカタカナ表記について、1)原つづりが連想されやすい表記、2)韓国語の発音を日本語母語話者が聞いてカタカナで表す表記、3)日本語母語話者がカタカナを発音して韓国語母語話者に理解される表記という三つの視点を示しつつ、2)の立場に立って研究を進めているが、その場合には、発音にのみ重点が置かれているために表記は異なるも発音が同じ、または非常に類似している場合にはカタカナ表記で区別することが不可能になってしまう恐れがある。

이정철·김대용(2013)では「국어의 가나 문자 표기법(国語の仮名文字表記法)」の問題点として日本語の外来語表記法には存在していない表記を無分別に追加した点とパッチムの表記に使用するカタカナは小さく表記できるという項目にも何の根拠も存在しないと、また表記法上の規則と実際の表記のずれについても言及している。

このように現行の韓国語カタカナ表記に関する法則には数多くの問題点が存在しているが、日本語話者を対象にカタカナ表記を体系的に調査した実験は管見の限り見当たらなかったため、本稿では調査結果の分析を通して日本語話者の韓国語カタカナ表記に対する表記実態を明らかにする。

4. 分析

本稿は日本語を母語とする韓国語学習者(以下JKLと称する)が韓国語の表記をカタカナでどのように認識しているのかを調査するために、韓国語学習歴のある被験者を対象に、まずハングルを提示し、それをカタカナで表記してもらい実験を行った。この実験では語頭に来た平音のハングル表記がカタカナ表記される際にどの程度の割合で清濁表記されるのか、また語中・語末に来る終声にどのような表記類型がみられるのかについて調査した。

4.1 調査対象

本稿ではカタカナ表記において大きな揺れを見せている、破裂音の平音が語頭にある場合と終声として表記されている際にJKLがどのように認識し、表記しているのかを調査するために、韓国語上級学習者³⁾を対象にカタカナ表記実験を行った。被験者とした韓国語

3) 本調査対象を韓国語上級学習者に限定した理由は、韓国語の音韻に対する知識不足に起因する表記

上級者は韓国語能力試験であるTOPIKの5級以上に合格している者、または韓国での居住期間が2年以上であることを条件とした。そして、実験に使用する語彙の選定は先行研究で述べられている表記や認識の揺れが大きい項目を中心に選定した。

終声による音韻変化の著しいものは、該当するハングル表記に対するカタカナ表記の揺れと終声を表す仮名表記を調査するという本稿の趣旨から外れてしまうために除いたが、終声による後続子音の濃音化は終声の著しい音韻変化は起こらないために調査対象の範囲内とした。

また、日本語内において既に一定の固有名詞として定着しつつある語彙の場合は、実際の発音やハングル表記に関係なく、日本語話者が発音しやすい、またはカタカナ表記しやすい形で固着化してしまっていることも十分に考えられるために、本稿ではそれらの語彙に加えて、実際には存在しない架空の語彙も対象に含めて実験を行った。

4.2 調査方法

本調査はGoogleフォームを利用してオンラインで行い、期間は2020年10月1日から10月14日までの二週間であった。101名から回答を得ることができ、その中で本稿の上級学習者の条件に合う被験者は全部で71名であった。

4.3 結果の分析

JKLによる韓国語の語彙をカタカナで表記する実験を実施した結果、語頭平音と語中・語末終声に対するカタカナ表記は以下ようになった。

4.3.1 語頭平音のカタカナ表記

ここでは韓国語平音に対するカタカナ表記のうち、語頭に現れる平音に対するカタカナ表記の結果を分析する。先行研究からも清音と濁音の表記が揺れることが想定されたが、本稿の調査結果は以下の<表1>のようになった。

の揺れを最小限にするためであり、学習者独自の表記体系が形成されていると考えられる。その上級者においても表記の揺れが多く見られる結果になれば、初・中級段階から表記の統一を指導していく必要があるといえるために本調査では上級学習者を調査対象とした。

<表1> 語頭平音に対するカタカナ表記頻度

語頭平音	件数	割合(%)
清音・半濁音	699	61.53
濁音	437	38.47

語頭平音に対するJKLの結果を見ると、清音または半濁音で表記したものが699件で全体の61.53%を占めた一方、濁音表記は437件で38.47%であった。このことから語頭に来る韓国語の平音表記では濁音よりも清音(半濁音)での表記が6割以上と多いことが分かった。次の表<2>では語頭平音の各字母別の結果を示し、それぞれの清音・半濁音と濁音表記の割合を見ていく。

<表2> 各字母に対する語頭平音のカタカナ表記頻度

字母	清音・半濁音		濁音	
	件数	割合(%)	件数	割合(%)
ㄱ	225	79.23	59	20.77
ㄴ	149	52.47	135	47.53
ㄷ	151	53.17	133	46.83
ㄹ	174	61.27	110	38.73

実験に使用された語頭平音の字母は「ㄱ」、「ㄴ」、「ㄷ」、「ㄹ」の四種であり、語頭平音「ㄱ」に対しては清音表記が225件で79.23%を占めて8割近い割合で清音表記されていることが分かった。語頭平音「ㄴ」に対しては清音表記が149件で、52.47%を占めるにとどまり、清音表記と濁音表記の差が4.94%と5%以内であった。半濁音と濁音の対立が起きる「ㄷ」においては、半濁音表記が151件で、53.17%を占めており、濁音表記(46.83%)よりも多少多い傾向にあることが分かった。最後に語頭平音「ㄹ」では清音表記が174件で全体の61.27%を占めており、語頭平音「ㄱ」ほどではないが、濁音よりは清音で表記される傾向が強いことが分かった。

続いて各字母ごとの表記の結果をまとめると以下のようなになる。

<表3> 語頭平音「ㄱ」に対するカタカナ表記

語彙	清音		濁音	
	表記	件(%)	表記	件(%)
곡(석)	コ	38(53.52)	ゴ	33(46.48)
격(남주)	キョ	53(74.65)	ギョ	18(25.35)
갑(현투)	カ	65(91.55)	ガ	6(8.45)
김(밥)	キ	69(97.18)	ギ	2(2.82)

語頭平音「ㄱ」に対する清濁表記を見ると「곡」に対しては清音表記「コ」が38件で53.52%を占めており、清濁表記が1割程の差で表記されていることが分かる。「격」に対しては清音表記「キョ」が52件の74.65%で、7割以上の割合と清音表記される傾向が強いことが明らかになった。さらに「갑」に対する清音表記「カ」は65件で91.55%を占め、「김」に対する清音表記「キ」は69件で97.18%を占めて、これらは9割以上の割合でほぼ清音表記されていることが分かった。

<表4> 語頭平音「ㄷ」に対するカタカナ表記

語彙	清音		濁音	
	表記	件(%)	表記	件(%)
독(립문)	ト	37(52.11)	ド	34(47.89)
독(바위)	トゥ	39(54.93)	ドゥ	32(45.07)
달(곡)	タ	42(59.15)	ダ	29(40.85)
대(김해)	テ	31(43.66)	デ	40(56.34)

語頭平音「ㄷ」に対する清濁表記を見ると「독」に対して清音表記「ト」が37件で52.11%を占めて清濁がほぼ均衡して表記されることが確認できた。「독」に対しては清音表記「トゥ」が39件で54.93%を占めており、「달」に対しては清音表記「タ」の割合が最も高く42件で59.15%に達した。一方の「대」に対しては清音表記「テ」が31件(43.66%)で最も低い結果となった。

<表5> 語頭平音「ㅁ」に対するカタカナ表記

語彙	半濁音		濁音	
	表記	件(%)	表記	件(%)
복(집)	ブ	44(61.97)	ブ	27(38.03)
비(빔빔)	ピ	14(19.72)	ビ	57(80.28)
백(대)	ペ	51(71.83)	ベ	20(28.17)
복(민호)	ボ	42(59.16)	ボ	29(40.84)

語頭平音「ㅁ」に対する表記⁴⁾を見ると、「ㅁ」に対する半濁音表記「ブ」が44件で61.97%を占めている一方で「비」に対しては半濁音表記「ピ」が他の半濁音表記に比べて著しく低い事が結果からも見て取れる。これは「비빔빔」が日本語に置いて「ビビンバ」または「ビビンパ」のように語頭平音に対して「ビ」という濁音表記が多く使われている事に影響を受けたものと思われる。「백」に対しては半濁音表記「ペ」が最も多く現れ、51件で71.83%と7割を超えており、「복」に対しては半濁音表記「ボ」が42件(59.16%)であった。

<表6> 語頭平音「ㅌ」に対するカタカナ表記

語彙	清音		濁音	
	表記	件(%)	表記	件(%)
진(라)	チョ	49(69.01)	ジョ ヂオ	21(29.58) 1(1.41)
진(압내)	チ	37(52.11)	ジ ヂ ⁵⁾	32(45.07) 2(2.82)
중(로)	チョ	46(64.79)	ジョ	25(35.21)
잠(원)	チャ	42(59.16)	ジャ ヂャ	27(38.02) 2(2.82)

語頭平音「ㅌ」に対する清濁表記を見ると、「진」に対して清音表記「チョ」が49件で最も多く、全体の69.01%と7割近くを占めている一方、「진」に対しては清音表記「チ」が37件で52.11%と最も低かった。「중」に対しては清音表記「チョ」が46件(64.79%)で、「잠」に対しては清音表記「チャ」が42件で59.16%であり、語頭平音「ㅌ」に対しては全ての場合において清

4) 「ㅁ」に対する表記としては日本語では清音ではなく半濁音と濁音が対応している。

5) 日本語の表記に置いて、「ジ」と「ヂ」は音価は同じであるが表記が異なる数少ない表記であるが、ここでは清音「チ」に対応させるために音価は「ジ」と同じである「ヂ」が使われたものと思われる。

音表記が過半数を占めた。

4.3.2 終声のカタカナ表記

ここでは日本語には存在しない多様な終声(パッチム)に対するカタカナ表記の様相を調べた結果、終声全体と語中・語末における表記の差が多岐に渡って存在していたために、それらを類型ごとにまとめたところ、開音節表記、閉音節表記、複合表記、表記脱落に分けることができた。

<表7> 終声に対するカタカナ表記の類型頻度 ()内は%

	開音節	閉音節	複合表記 ⁶⁾	表記脱落 ⁷⁾	その他
全体	556(43.51)	629(49.22)	32(2.50)	58(4.54)	3(0.24)
語中	300(46.95)	321(50.24)	16(2.50)	1(0.16)	1(0.16)
語末	256(40.06)	308(48.20)	16(2.50)	57(8.92)	2(0.31)

終声全体に対するカタカナ表記では、閉音節表記が629件で全体の49.22%と最も多い割合を占めた。続いて開音節表記が556件で全体の43.51%であり、それ以外にも表記が脱落して何も表記されなかった表記脱落が58件で4.54%、閉音節と開音節の両方を組み合わせた表記である複合表記が32件(2.50%)、その他の表記が3件(0.24%)であった。

語中終声に対するカタカナ表記だけを見ると、閉音節表記が321件で最も多く、語中終声全体の50.24%を占めていた。これは全体の割合と比べても1.02%ポイント多いだけであり、終声が語中に置かれている場合には閉音節で表記される割合が高いが終声全体との差は大きくないことがわかる。続いて開音節表記は300件で46.95%を占めているが、全体よりも3.44%ポイント多かった。複合型表記では16件で2.50%であり、脱落とその他がそれぞれ1件ずつで、各0.16%に過ぎず、ほぼ観察されない事項であることがわかった。

最後に語末終声に対するカタカナ表記では、閉音節表記が308件(48.20%)で最も多く、開音節は256件(40.06%)であった。一方、語中終声では1件しか見られなかった脱落表記が語末終声では57件で8.92%を占めており、語末終声においては表記の脱落が比較的多いことが

6) 複合表記とは、閉音節表記と開音節表記の両方が使用された表記で、「ック」や「ップ」などがそれに該当する。

7) 表記脱落とは、開音節表記や閉音節表記などが使われる、該当位置に何も表記されずに省略されている場合を意味する。

分かった。

4.3.2.1 語中終声

ここでは終声表記のうち、語中終声に対するカタカナ表記を字母ごとに詳しく分析していく。

<表8> 各字母に対する語中終声のカタカナ表記の類型頻度

字母	開音節	閉音節	複合表記	表記脱落	その他
ㄱ	138(48.59)	137(48.24)	7(2.47)	1(0.35)	1(0.35)
ㄴ	81(38.03)	132(61.97)	-	-	-
ㄷ	81(57.04)	52(36.62)	9(6.34)	-	-

語中終声の表記に対する字母には「ㄱ」、「ㄴ」、「ㄷ」の三種類が使用され、語中終声「ㄱ」に対しては開音節が138件で48.59%、閉音節は137件の48.24%と両者には1件(0.35%)の差しか存在せず、ほぼ均衡していることが分かった。複合表記は7件(2.47%)、表記脱落は1件(0.35%)であり、その他の表記には「クッ」が1件あった。語中終声「ㄴ」に対しては閉音節が132件で61.97%を占め、開音節は81件で38.03%であった。「ㄷ」に対しては開音節が81件で57.04%を占め、閉音節は52件の36.62%にとどまり、複合表記「ッ」が9件(6.34%)であった。このことから語中終声では字母の種類によって開音節と閉音節の出現の傾向には違いがあることが分かる。

以下の表<9>は終声「ㄱ」に対するカタカナ表記を示している。

<表9> 語中終声「ㄱ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節		複合表記		脱落・その他	
	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件数
곡(석)	ク	37(52.11)	ッ	34(47.89)	-	-	-	-
북(짐)	ク	35(49.30)	ッ	32(45.07)	ック	4(5.63)	-	-
북(도)	ク	33(46.48)	ッ	36(50.70)	ック	1(1.41)	クッ	1
독(바위)	ク	33(46.48)	ッ	35(49.30)	ック	2(2.82)	×	1

語中終声「ㄱ」における表記結果を見ると、「곡」に対して開音節「ク」表記が37件で52.11%

を占めて過半数を超えており、閉音節「ッ」表記は34件(47.89%)であった。「ㅍ(ㅍ)」に対しては開音節「ク」が35件(49.30%)で最も多く、閉音節「ッ」が32件(45.07%)が続いたが、複合表記「ック」も4件(5.63%)が見られた。「ㅍ(ㅍ)」では閉音節が最も多く36件(50.70%)で、開音節は33件(46.48%)、複合表記「ック」が1件(1.41%)にその他の表記「クッ」も1件(1.41%)見られた。「ㄷ」に対しては閉音節が35件(49.30%)、開音節が33件(46.48%)、複合表記「ック」が2件(2.82%)で、脱落表記も1件(1.41%)であった。

<表10> 語中終声「ㄹ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節	
	表記	件(%)	表記	件(%)
김(ㄱ)	ム	28(39.44)	ン	43(60.56)
탐(ㄷ)	ム	45(63.38)	ン	26(36.62)
(비)빔(ㅍ)	ム	8(11.27)	ン	63(88.73)

語中終声「ㄹ」における表記結果を見ると、「김」に対しては閉音節「ン」表記が43件で60.56%を占めて開音節「ム」表記の28件(39.44%)よりも多かった。一方の「탐」においては唯一開音節「ム」表記が45件で63.38%と多くなっているが、「빔」では開音節「ム」表記はわずか8件(11.27%)にすぎなかった。

<表11> 語中終声「ㅍ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節		複合表記	
	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)
합(ㄱ)	プ	52(73.24)	ッ	10(14.08)	ツプ	9(12.68)
입(ㄷ)	プ	29(40.85)	ッ	42(59.15)	-	-

語中終声「ㅍ」には三種類の表記のみが見られ、「합」に対しては開音節「プ」表記が52件(73.24%)で最も多く、閉音節「ッ」表記の10件(14.08%)と複合表記「ツプ」が9件(12.68%)が続いた。「입」では閉音節「ッ」表記が42件で59.15%を占めた。

このように語中終声に対しては語彙によって開音節と閉音節の出現割合には大きな差があることが調査結果から判明した。

4.3.2.1 語末終声

ここでは語末に現れる終声の表記の結果を検討する。

<表12> 各字母に対する語末終声のカタカナ表記の類型頻度

字母	開音節	閉音節	複合表記	表記脱落	その他
ㄱ	31(21.83)	111(78.17)	-	-	-
ㄴ ⁸⁾	-	120(84.50)	2(2.82)	20(14.08)	-
ㄹ	71(100)	-	-	-	-
ㄷ	46(64.79)	24(33.80)	1(1.41)	-	-
ㅁ	108(50.70)	53(24.88)	13(6.10)	37(17.38)	2(0.94)

語末終声のカタカナ表記に対しては、字母として「ㄱ」、「ㄴ」、「ㄹ」、「ㄷ」、「ㅁ」の五種類が使用された。語末終声「ㄱ」には開音節は31件で21.83%を占め、閉音節は111件で78.17%と圧倒的に多かった。語末終声「ㄴ」には開音節は1件も表れず、閉音節は120件で84.50%と8割を超え、脱落表記も20件で14.08%ほど見られ、複合表記は2件(2.82%)であった。語末終声「ㄹ」は71件全てが開音節表記のみだった。語末終声「ㄷ」では開音節が46件で全体の64.79%を占めて最も多く、閉音節は24件で33.80%、複合表記は1件(1.41%)のみであった。最後に語末終声「ㅁ」は開音節が最も多く108件の50.70%であり、閉音節が53件(24.88%)と続き、脱落表記も37件で17.38%に達した。また、複合表記は13件(6.10%)、その他の表記が2件(0.94%)であった。続いて各字母ごとの表記の詳細に対する結果をまとめると以下ようになる。

<表13> 語末終声「ㄱ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節	
	表記	件(%)	表記	件(%)
(곡)식	ク	11(15.49)	ッ	60(85.51)
(달)곡	ク	20(28.17)	ッ	51(71.83)

語末終声「ㄱ」における表記結果を見ると「식」に対しては閉音節「ッ」表記が60件で85.51%

8) 韓国語の終声「ㄴ」と「ㄷ」は表記は異なるが語末終声として表れる場合にはどちらも「ㄴ」と同様の終声音価/ㄴ/を持つために、ここでは「ㄴ」として統一した。

を占め、開音節「ク」表記は11件(15.49%)であった。「ㄱ」に対しても閉音節表記の方が多く、「ッ」が51件で71.83%を占め、開音節「ク」表記は20件(28.17%)であった。

<表14> 語末終声「ㄱ」に対するカタカナ表記

語彙	閉音節		複合表記		表記脱落	
	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)
(역호)ㄱ	ッ	63(88.73)	ッツ	1(1.41)	×	7(9.86)
(압력)ㄱ	ッ	57(80.28)	ッツ	1(1.41)	×	13(18.31)

語末終声「ㄱ(ハ,ス)」における表記結果をみると「ㄱ」に対しては閉音節「ッ」表記が63件で88.73%を占めており、表記脱落は7件で9.86%、複合表記は1件(1.41%)のみが観察された。「ㄱ」に対しても閉音節「ッ」表記が57件で80.28%と8割以上を占めている一方、複合表記は1件(1.41%)であり、表記脱落は13件(18.31%)と「ㄱ」より倍近く多いことがわかった。

<表15> 語末終声「ㄴ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節	
	表記	件(%)
(학여)ㄴ	ル	71(100)

語末終声「ㄴ」における表記結果は「ㄴ」に対して71件全てが開音節「ル」表記で示された。

<表16> 語末終声「ㅇ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節		複合表記	
	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)
(복)ㅇ	ム	46(64.79)	ン	24(33.80)	ツム	1(1.41)

語末終声「ㅇ」における表記結果を見ると「ㅇ」に対して最も多く観察されたものは開音節「ム」表記で46件(64.79%)であった。続いて閉音節「ン」表記が24件で33.80%を占め、複合表記「ツム」は1件(1.41%)のみであった。

<表17> 語末終声「ㄹ」に対するカタカナ表記

語彙	開音節		閉音節		複合表記		表記脱落		その他
	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)	表記	件(%)	
(탐)랍	プ ブ	40(56.34) 1(1.41)	ッ	19(26.76)	ツプ	8(11.26)	×	1(1.41)	ンブ プッ
(김)밥	プ ブ	33(46.48) 4(5.63)	ッ	18(25.35)	ツプ	3(4.23)	×	13(18.31)	-
(비빔)밥	プ ブ	26(36.62) 4(5.63)	ッ	16(22.54)	ツプ	2(2.82)	×	23(32.39)	-

語末終声「ㄹ」における表記結果は他の表記に比べてカタカナ表記が多彩な様相を見せている。

5. おわりに

本稿は日本語話者の韓国語学習者が韓国語の語彙に対してどのようなカタカナ表記を施すのかを語頭に現れる平音と語中・語末に現れる終声を対象に調査、分析したものである。実験の結果から以下のような事実が確認できた。

語頭平音において清音・半濁音表記が全体の6割を超える61.53%を占め、濁音で表記されたものは38.47%であり、語頭における平音に対しては清音または半濁音で表記される傾向が濁音表記よりも強いことがわかった。また語頭平音の表記は各音節により偏りがあり、「ㄱ」に対しては8割近い79.23%が清音表記で示されて最も高い割合を占め、次いで「ㄷ」が6割を超える61.27%であった。一方の「ㄹ」は53.17%、「ㄴ」は52.47%のようにどちらも清音表記が濁音・半濁音表記よりも多かったが清音表記と濁音表記の差が10%未満で、その差は小さくなかった。

終声におけるカタカナ表記はその様相が非常に多岐に富んでおり、それらを類型別にまとめると、「開音節表記」、「閉音節表記」、「複合表記」、「表記脱落」の四種類に分類することができた。終声表記の全体では閉音節表記が49.22%を占めた一方で開音節表記は43.51%であり、表記脱落(4.54%)、複合表記(2.50%)、その他(0.24%)と続いた。語中終声表記においては、閉音節表記が50.24%と半数を超えた一方で、語末終声表記では表記脱落が8.92%を占めるなど、語中終声表記に比べて非常に多い結果となった。

以上の結果を踏まえて、先行研究で述べられていた問題点を考察する。多くの先行研究では語頭に来る初声は清音または半濁音で表記されるとされていた。しかし、JKLはハン

グルを見てカタカナ表記する際に清音にするか濁音にするかは、子音によって異なっていた。これはJKLが初声は清音で発音されるという韓国語の規則から清音で表記しつつも、激音も仮名表記では清音で表記されるために、それを避けるために平音に対して濁音表記をした可能性などが考えられる。

今回の調査では音韻変化を含まない韓国語彙に対するカタカナ表記であったために、音韻変化を含む韓国語のカタカナ表記に対する日本語話者の認識に関しては調査範囲に含めることができなかった。また、韓国人日本語学習者を対象にも学習者としてのカタカナ表記に対する表記意識についても今後、調査していきたい。

【参考文献】

- 김윤미(2012)「한국어의 일본어 가나표기 실태조사 연구: 효율적인 일본어 표기교육을 위한 일고찰」세종대학교 대학원 석사학위논문
- 박혜란(2007)「日本語表記에 관한 研究韓國飲食名을 中心으로」한국외국어대학교 대학원 박사학위논문
- 배석주(2001)「일본어 편수자료 국어의 가나 문자 표기 연구」『국제언어문학』4, 국제언어문학회, pp.51-67
- 오미영(2009)「한국인의 일본어 표기의식에 관한 조사연구」『일본연구』39, 한국외국어대학교 일본연구소, pp.139-159
- 이정철·김대용(2013)「국어의 가나 문자 표기법의 문제점」『일본문화학보』56, 한국일본문화학회, pp.97-111
- 이주리아(2019)「観光地名の翻訳および表記に関する考察」『일본언어문학』47, 한국일본언어문화학회, pp.89-112
- 장원재(2009)「한국 음식명의 일본어 표기 혼용실태에 관한 일고찰」『일본어문학회』45, pp.207-224
- 편무진(2009)「일본 명치시대의 한국어학습서에 보이는 한국어 가나(仮名) 표기에 관한 고찰 -명치 이전 한국어학습서류와의 비교를 통하여」『일본문화학보』43, 한국일본문화학회, pp.83-104
- 한탁철(2011)「韓國의 飲食名에 보이는 日本語 가타카나表記에 대한 一考察」『일본문화연구』40, 동아시아일본학회, pp.669-687
- 황정민(2002)「한국어 고유명사의 가타카나 표기에 대한 연구」『일본연구』창간호, 고려대학교 일본연구 센터, pp.277-293
- 梅田博之(1989)「韓國語の片假名表記」(『講座 日本語と日本語教育 日本語の文字表記(下)』明治書院
- 小川明美(2012)「韓国語のカタカナ表記について-聞き取り調査による語中子音の傾向分析」『일본문화학보』55, 한국일본문화학회, pp.45-61
- 成儒彬(2017)「日本人による発音を韓国人はどう知覚するか: 無声破裂音と有声破裂音について」九州大学修士学位論文
- 李忠均(2020)「韓国における外来語表記法の政策の変遷 - 仮名のハングル表記を中心に -」『神奈川大学言語研究』42, 神奈川大学言語研究センター, pp.57-79

논문투고일 : 2020년 12월 20일
 심사개시일 : 2021년 01월 17일
 1차 수정일 : 2021년 02월 05일
 2차 수정일 : 2021년 02월 14일
 게재확정일 : 2021년 02월 17일

 <要旨>

日本語話者の韓国語カタカナ表記に関する一考察

黒柳子生

この研究では韓国語の破裂音である平音が語頭にある場合と終声として表記されている際に、日本語を母語とする韓国語学習者がどのようにそれらを認識し、カタカナで表記しているのかを調査した。

実験の結果を通して、次のような事実を確認することができた。語頭平音において、清音と半濁音の表記が全体の61.53%を占めた。そして濁音で表記されたものは38.47%を占め、語頭における平音に対しては清音または半濁音で表記される傾向が濁音表記よりも強いことが分かった。また、語頭平音の表記は各音節により偏りがあり、「ㄱ」に対しては8割近い79.23%が清音表記で示されており、最も高い割合を占めた。次いで「ス」が61.27%であった。一方の「ㄷ」は53.17%、そして「ㄴ」は52.47%であり、どちらも清音表記が濁音と半濁音表記よりも多かった。

終声におけるカタカナ表記はその様相が非常に多岐に富んでいた。終声のカタカナ表記を類型別にまとめると、「開音節表記」、「閉音節表記」、「複合表記」、「表記脱落」の四種類に分類することができた。終声表記の全体では閉音節表記が49.22%を占め、開音節表記は43.51%であった。そして表記脱落(4.54%)、複合表記(2.50%)、その他(0.24%)が続いた。語中終声表記においては、閉音節表記が50.24%と半数を超えた一方で、語末終声表記では表記脱落が8.92%を占めるなど、語中終声表記に比べて非常に高い結果となった。

A study on Korean Katakana Notation by Japanese Speakers

Kuroyanagi, Shigeo

In this study, to investigate how JKL recognizes and written by Katakana when Korean plosives are written at the beginning and at the end of the word. Conducted an experiment to write Korean vocabulary in katakana by advanced Korean learners.

Through the results of the experiment, we were able to confirm the following facts. On Heion at the beginning of the word, the notation of Seion and Handakuon accounted for 61.53% of the total. And it was found that the one written in Dakuon accounted for 38.47%, and the tendency to be written in Seion or Handakuon was stronger than that in Dakuon for Heion at the beginning of the word.

The katakana notation corresponding to Batchim was very diverse. When the Katakana notation of Batchim is summarized by type, it can be classified into four types: "open syllable notation", "closed syllable notation", "composite notation", and "notation omission".